

保育の実践と理論を求めて 形成する社会的経験 異質な他者と共同の生活を

津守 真

カナダとアメリカで、いろいろの人たちと意見を交しながら旅をして、子どもの生活をつくるために私共と同様に日々心を碎いている人々が、現代のこの時に世界の各地にいることを発見し、心強い思いをもって帰ってきた。それから間もなく私も参加する機会を得た、日米欧幼児教育・保育会議は、主としてヨーロッパの幼児教育の指導者たちが、精力的に二日間にわたって講演された稀有な機会であった。既に多くの方々がこれに参加されてご承知のように、フランス、スイス、スウェーデン、ドイツのOME P（世界幼児教育機構）の指導者たちと、アメリカのACE I（国際幼児教育連盟）の指導者が、同じ時に講演し、またそれを聞くことは、ヨーロッパやアメリカに出かけていっても、めったに得られる経験ではない。私は、今回のカナダ、アメリカの旅をも合わせていろいろのことを考えさせられたのであるが、その中からいくつかの点を述べてみたい。

第一には、現実の子どもと家族の必要そのものと取組んでいることである。実際に、子どもは、遊ぶことを欲

している。大人が何を期待しようと、子ども自身は遊ぶことを望んでおり、それを必要としている。幼稚園や保育所はこれにどのようにこたえることができるか。また、この十年間に、母親がはたらくことが多くなっている。しかも、子どもは、預けられるだけではなくて、だれかが本気になって保育せねばならない。これらの問題に対して、欧米の保育者たちは、子どもの観点から、まじめに取組んでいる。既製の制度、規則、指導書にどのようにあてはめるかに神経を使うのではなくて、現実に生じている、子どもの生活を疎外する条件や考え方をどうしたらよいかという生きた問題と取り組んでいる。

グタール女史は、現代の就学前教育の新たな形態について言及し、次のように述べる。

「事実、過去二、三〇年間にわたる多くの国々における実践と研究は、幼児にとり、家庭との結びつきが極めて重大であることを示しました。……われわれは、『家庭の権利』について主張せねばならぬ段階に到達しています。幼児教育を制度化することに伴う危険についても気

づかれ始めています。……」そしてその新しい要求を実現するのに、これまでヨーロッパで発展してきた古典的幼稚園とは違った形態を必要とするなどを述べ、四つの点を指摘している。保育施設が、(1)より開放的になること、家族に対しても地域に対しても、(2)より柔軟になると、施設や企画において。(3)より移動性をもつこと、(4)より協力的になること。

保健や福祉、社会サービスの機関と。グタール女史は、フランスの幼児教育監督官であり、またOMEPEの世界総裁であるが、幼児のために取組む積極的姿勢には、伝統にとらわれない新鮮さを感じさせられる。このことは、個人の特性もあるが、人間が生きるために伝統を変えってきた西欧社会の性格がそれを可能にさせているのではないかと思う。過去三十年間の日本の社会の動きを考えるとき、私共の社会は、精神的にも若さを失いつつあるのではないか。

第一には、ヨーロッパの教育改革者たちの精神が、現

代に生きていることである。ルソー、ペスター、ローラン、フ
レーベルの教育者魂（たましい）ともいふべきものは、
単なる教育史の上の知識ではなく、現代の西欧の児童教
育者の中に脉々と流れていることを、スイス、ジエネー
ブ大学のルソー学院付属園長のデュバルク教授、ドイツ
の労働厚生社会省のモスカル女史らのエネルギーで
知的な講演の中に感じさせられた。近年、西欧の児童教
育論者の中には、新奇なプログラムを宣伝する傾向があ
つたが、今回の講演者のように、児童教育の実際に長年
たずさわってきた人々は、古典的教育精神を受け継い
て、現代を生き抜いてきたのであることを知った。

デュバルク教授は次のように語る。

「ルソーは決して古びないと云つたのはトルストイであ
る。ルソーの考えは現代にお新らしく、われわれの時
代に栄えるのではないか。」ルソーが強調したように、
書物の知識は豊かな直接経験と自身の発見に代わること
はできない。」

「（ルソーの）感覚教育を実践に移したのはペスター

ローランであり、これは後にフレーベルによつて児童教育
に発展した。」「子どもは自然の観察によつて発見に至
る。仲介されない直接の観察こそ大切である。」

「ルソー・インスティチュートは、心理学者のクラバレ
ートによって創設された。彼はピアジェの先生でもあ
る。」「クラバレートの考えは二点に集約される。ひとつ
は教育の個人化であり、他は教育の機能化である。前者
は子どものニードにかなうこと、すなわち、ひとりひと
りの子どもの深い要求にこたえることを意味する。」

「子どもと共に、子どもによつて、ルソーの哲学からペ
スターの経験主義へ、経験的教育から発生的心理学
へとわれわれは導かれてきた。この三者の間には強い
結びつきがある。子どもにとって重要なことは、周囲の
自然と一物を、自ら探索し、行為し、発見することであ
る。幼稚園は、自然と子どもと、他の何ものによつても
かえられない教師とが出会う特別な場所である。」

第三に、今回米国およびカナダを旅し、また、欧洲の

幼児教育の指導者たちの語るのをきいて、私自身、最も考えさせられたことは、西欧の社会が、子どもの社会的経験を重視していることである。それは、従来から云われてきたような、子どもの社会性の養成のためということではない。自分たちとは違った異質な他者を加えてひとつ社会を形成して生きる社会経験を、幼いときからしておくことの重要さである。

このことは、この三十年間に西欧の社会が直面することとなつた世界情勢の変化とも関連があるだろう。かつての植民地が次々に独立した後にひきうけることになつた移民の問題、東南アジアの難民、また黒人など、その子どもたちを受け入れるのに、西欧の国々の学校は、並々ならぬ努力をした。社会全体からみれば、不合理的な偏見も、いまなお強くあることを知りながらも、学校教育がこの問題といかに正直に真摯にとりくんできたかということに、今回、私は衝撃を受けたのである。そのいくつかを挙げてみよう。

ミネアポリスの私の知人、メアリー・アンの家で、韓

国から孤児を養子にしたとき、その子どもたちが元気に成長してゆく支えになったのは、幼稚園と学校が心から彼を受け入れたことであった。最初の一週間で、この子どもたちは、幼稚園と学校を、自分たちのものと感じることができた。それはこの子たちだけの特例ではない。

他国、他民族、他文化の子どもたちは、アメリカの学校には多数いる。最初は全く英語を分らない子どもたちが、困惑することなしに学級社会の中で生活できるようになっている。学校がそこまで変化してきている。

フランスの学校で、ペトナムの難民の子どもを入れたときに、フランス語が話せるようにするのは勿論だが、それのみでなく、ペトナム語のできる先生をいれる。常勤が困難な場合には、パートタイムで雇う。こうして、それぞれの子どもの文化と言語を尊重する。つまり、異質な文化の子どもたちを、ひとつの文化に同化させるのではなくて、異質なままに、共同の社会を形成することを考えるのである。

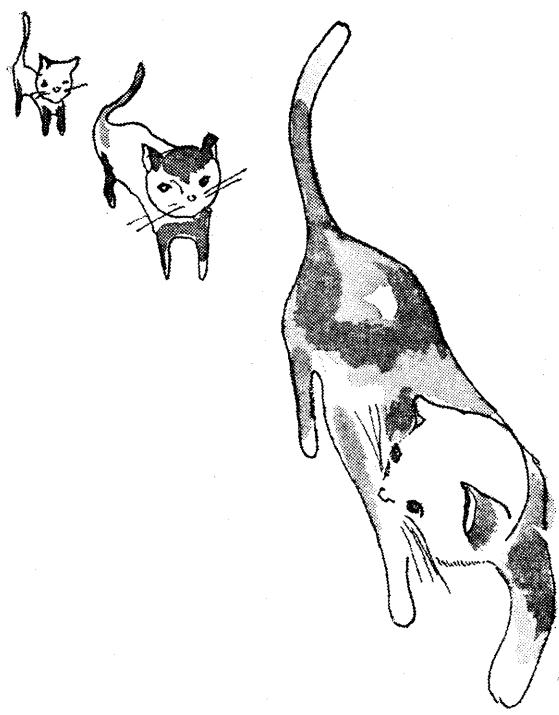
北欧のある学校では、四人に一人は異言語、異文化の

子どもであるという。

グタール女史は、講演の中で、「幼児教育における社会性の概念の展開」について強調し、次のように述べている。

「私どもの論議のこの点で、社会化の概念が前進的に発展してきたことを判断することができます。就学前施設

は、最初は、幼児が友達を通して仲間関係をためすところと考えられました。そして同時に子どもは、小学校の準備として、一層構造化した社会生活に曝されるのであると考えられました。最近になって、子どもを既にでき上った組織の中に受け入れることは、子どもが自らの内部に作り上げている社会関係のすべてを受け入れること



であるとの認識が生まれました。かくて、それぞれの子どもは、その友達を通して、きわめて多様な社会関係と接觸するのです。

「子どもをとりまくコミュニティの真中に、より小さな、子どもたちのコミュニティがあります。就学前教育機関は、その存在を認めてきました。心理学は、子どもの心理的特性を明らかにしましたが、私どもに子どものグループのまったく独創的な性格に気づかせてくれたのは、就学前教育です。」

「個人の創造性と人間の相互関係の自律性の発達を刺激するような社会教育は、常に平和のための教育に関する私どもの仕事の基礎でもありました。」

このことからも見られるように、社会的経験が幼児期に必要であるとき、それはすでに、個人の社会的能力を伸ばすという考え方を超えている。また、社会的適応という考え方とも異なる。異質な他者を加えて共同の社会を形成する経験を積むことの必要が強調されているのである。日本の教育では、社会性や社会的態度の育成す

ら、競争原理の上で考えられ、いかにしたら他人よりすぐれた社会性を身につけさせることができるかという考え方になってしまふ。社会的能力がある者も、ない者も、一緒に共同の生活を形成する経験なのである。

日本の社会そのものが、異質な他者を排除した上で成り立つており、さらにその上に、同質な社会を作つてゆこうとする傾向が、私共自身の中にある。心をひろげて、異質な者を迎えてゆくようには、あらゆる場面で、私共の課題なのだと思う。

アメリカの教育界でひろがっているメインストリーム（大河主義）の運動は、このような考え方方に立つものであろう。障害児を普通の学校にいれるということ、この考え方の一環にほかならない。

障害児をどこまで普通学級の中に入れてゆくことができるかという問題については、また別に論ずることにしたい。

また、欧州・連合体（EC）が、教育の基本として考

えでいる」とは、統一と多様性である。「多様性のある
あまに、ヨーロッパの文化的同一性の自覚を励ます」
と、また、世界の他の部分との対話と相互理解の可能性
を認識する」と、歐州連合体の教育手引書 (Learn-

ing for Life, the Council of Europe's Work for education) には記されている。グタール女史が、幼児教育における社会性の概念と云ふとき、これが同じ考え方の上にあると云つてよいであろう。

私は、これらのことを考えるととき、この三十年間の白人社会の払つてきた努力に敬意を払わざるをえない。もちろん、新聞紙上でみるように、それとは逆の社会的できらとも多くある。しかしながら、少なくとも、人間の理想を追求することを根幹とする教育の分野には、真実にこのことに精力を傾けてきた人々が多くいることは、現実の事実である。私が三十年間にわたつて知つてきた人々とその周囲を見るとき、このことをあらためて知らされる。

この点から日本の教育を考え直すとき、私は、戦後

四十年の間に、次第に世界的理念を見失い、スケールが小さくなつてきている。日本の社会全体が、国際化を唱えながら、異質な他者を排除する傾向を強めさせている。

私はこのことを、単に政治のことではなく、教育の問題として述べている。教養のある人間ならば、だれであれ他者を人間として尊重するのは当然と考えるだろう。しかし、実際となると、比較的同質な集団の者が寄り集まって、常識的理解の中に入らない異質な少数者を受け入れることができない。異質な者を受け入れるときには、私共自らが、変らなければならないのである。眞の教養とは、自らが変化することを可能にするものではないか。子どもの教育においても、教員養成における教育においても、私共の日日の自己教育においても、眞の教養と文化とを必要としている。その基礎の上に立たない政治、教育、福祉は、異質な他者に対する行は、蛮行とすらなり得る。

幼稚教育において、西欧の指導者たちが、異質な他者と共同の生活を形成する社会的経験という考え方についたのには、最初に述べたように、第一には、彼らが現実の子どもと家族の必要そのものと取組んだこと。第二には、ヨーロッパの教育改革者たちの人間教育の精神が背景にあつたことによると云つてよいであろう。そして、現代の技術化された国際社会と社会変化に直面したとき、この社会的経験という考え方方が生れる必然性があつた。

このことは、子どもの生活の実際についていうと、決して目新しいことを云つてゐるのではない。幼児は、もともと、皮膚の色や言語の相異があつても、その子どもたちと砂やつみきを共にして遊び、けんかし、また遊ぶ。子ども同士の直接のふれあいによる遊びは、むかしも今もかわらない。それを人為的に変えているのは大人である。

ひとりひとりの子どもが十分に満足して遊べるようにするにはどうしたらよいかというのが、幼稚教育の最

も現実的な問題である。また、そのことが、ルソーからフレーベルへと教育改革者たちが強調した点でもあつた。現代でも、子どもは自分の手足と身体を使って遊ぶ機会を与えられるとき、テレビの前に坐つていてことよりも、遊ぶことを選ぶ。

子どもが十分に遊ぶことのできる空間と時間を与えること、それを保障する大人を養成することは、現代の西欧の幼稚教育の指導者たちの最大の関心である。

このように考えてみると、家庭における保育と、幼児教育施設における教育との関連が問題になる。幼稚教育は保育なのか、教育なのか。それは果しない論議になります。

この点で、グタール女史が指摘されたことはほとんど結論を出している。

「どこにおいても、幼児の教育は、発達のすべての側面を考慮せねばならないことは、いまや広く認められています。この新しい自覚から、かつては世界中で用いられていた『就学前教育』という語は、『幼児期の養護と教

『育』 Early Childhood Care and Education という表現に次第に変えられて しまつた。『養護』 Care と『教育』 Education とは、実際、共生していねむのです。幼児に与えられるすべての養護は、ある面では教育の源でありまつ。そして教育をするひとは、（それがもたらす配慮のゆえに）一層の養護を加えることになります。」

日本語には、はじでいう養護と教育を一緒にした保育という語がある。西欧語にも同じ概念の語が生れてきたといつてよいだらう。

* マドレーヌ・グタール「幼児教育の世界的展望」とフランスの「就学前教育」現代保育 Vol. 33. 一九八五年十月号、チャイルド本社

(愛育養護学校)

